

## リングルマルチブラケット法と長期安定

長野県塩尻市 ひろ矯正歯科 廣 俊明



### 【略歴】

- 1985 松本歯科大学歯科矯正学講座助手
- 1990 日本矯正歯科学会認定医
- 1993 博士（歯学、乙）、福岡歯科大学
- 1997 日本矯正歯科学会指導医
- 1994 ひろ矯正歯科開業
- 2002 英国矯正歯科認定医(M-Ortho RCSEd)
- 2005 European Board of Orthodontists
- 2006 日本矯正歯科学会専門医
- 2008 World Board of Lingual Orthodontics 第一号(by ESLO)
- 2010 World Board of Lingual Orthodontics (by WSLO)
- 2019 E.H. Angle Society of Orthodontists, Midwest component, Member At-large

アメリカでは矯正治療は保険診療、アジアでは矯正治療は保険外の国が多いそうです。費用の面からでしょうか、アメリカでは再治療は再チャージ、アジアでは再治療は再チャージしにくいという先生が多いようで、その場合、私達医師側に非常に大きな負担となります。

1980年代、まだリングルマルチブラケット法（以下リングル）が酷評されていた頃、私はリングルをやったことも無いのに、リングルは治療期間が長く、ちゃんと治らないからやめた方が良く、舌がズタズタになる、喋れなくなる、などと患者さんに説明していました。その理由のひとつには、矯正には必ず後戻りがついてまわるため、リングルで治療をした患者さんが再治療をリングルで希望したら、矯正臨床そのものが成立する筈が無いと思っていたからです。

ところが実際に自分でリングルをやってみると、当時のリングルの問題点が見え、それらを一つ一つ改善することで酷評されていたリングルの壁を乗り越え、EBOなどの試験をリングルで通過する事が出来ました。

故 Wick Alexander 先生は、治療結果が良ければ予後も良くなる、治療結果が悪ければ予後も悪い、と仰っています。

僭越ではございますが、私の矯正治療の考え方とやり方について、リンガルでの治療と保定を含めてお話させて頂ければと思います。